奨学金を受けた若者たちの声

Vol. 2

掲載している若者の氏名（暮らす地域）

5. Boris Reyder Garcia Vela（マイナス郡 ロレト県 イキトス、ベレン）17歳
6. Greysi Melissa Mozombite Ortega（マイナス郡 ロレト県 イキトス）18歳
7. Julio Abel Daza Monteiro（イカ）30歳

2021年10月

名前：Boris Reyder Garcia Vela
地域：マイナス郡 ロレト県 イキトス、ベレン　　年齢：17歳

現在、私は父、母、兄、私の４人で暮らしていますが、兄は仕事でいつも家にいるわけではないので、ほとんどが両親と私の３人です。家族としてはお互いに理解しようとしています。６人の兄弟がいて、私は７番目の末っ子で17 歳です。

私の家族の経済状況は一般的です。時々、少し厳しい状況になるときもありますが、対処する方法を知っています。

奨学金は支援というよりも、逆境にあっても闘い続けるための衝動と言った方がいいかもしれません。この奨学金は私にとって大きな助けとなっているので、無駄にしたくありません。

もし奨学金がなかったら、いまは経済的な事情から学校にいけていないかもしれません。

時には、移動するのに十分なお金がなく、早起きして勉強場所まで歩かなければならないこともあります。この奨学金の支援のおかげで、それを乗り越えて前に進むことができています。

良い仕事をするために自分にあう仕事の分野を探し、その仕事をしながら自分が考えている別のキャリアの勉強を続けるためにお金を払いたいです。また、両親や家族を助けたいと思っています。

ゆくゆくは、家庭を持ち、仕事で成果を出し、他の人と違うことをしたいと思っています。前に進んでいきたいと思っている子どもたちをサポートしたり、モチベーションを高める話をしたり、助けを必要としている人の力になったり、他の人と高め合ったりしたいと考えています。家族がより良い生活を送れるように。

ありがとうございました。

私はグレイシー・メリッサ・モソンビテ・オルテガ、18歳です。イタヤ川流域のサン・アンドレスのコミュニティ出身です。私の他に３人の兄弟がいて、私は２人目２番目の娘です。母と３人の兄弟と一緒に住んでいます。

私がまだ中学に通っていた頃は、私は父と母の両親と一緒にくらしていて、それが私の力になり学校の成績で一番をとる力になりました。

その後、高校卒業間近に両親が離婚してしまい、そのことが私を苦しめ、勉強したくないと思うようになってしまいました。

しかしながら母は私に勉強を続けるように勧めてくれました。そんなとき、コロナウイルスが出現し、私たちの収入は減りました。

そのため、勉強ができるだけのお金が手に入るまで、1～2年は働こうと考えていました。病気に気をつけなければならないので難しいけれど、不可能ではないと思っていました。

私が望んでいたのは、勉強してプロフェッショナルになり、困難な状況にある家族を支えることだったので、この奨学金は私にとって大きなチャンスであり、大きな贈り物でした。

もし奨学金の支援を受けていなかったら、私は今勉強をしておらず、2年遅れていたでしょう。今は熱帯林生態学技術の第３ターム期に入っています。

パンデミックの影響で多くの困難がありました。例えば、オンライン授業が行われますが接続状況がよくないこと、インターンシップ　実習に大学の車で行けず自力で行かねばならないことなどです。

他に、実習用の教材は倉庫に保管されていることが多く、生徒　学生自身が購入しなければならないため、常に完全に教材がそろうということではない点もありました。

様々な逆境があっても、達成することが私の目標なので、最後までやり遂げなければなりません。私が勉強していることは、自然にも関係することなので、情熱を持って取り組んでいます。多くの絶滅危惧種の世話もしています。

次ページへつづく▶▶

▶▶前ページのつづき

学業を終えたら仕事をはじめ、同時に空いた時間を使って土木工学を勉強しようと思っています。自分がある程度経験を積んだ研修のなかで触れ、私の好きな分野でもあります。

それ以来、私はずっと土木技師になりたいと思っていました。何があっても達成しなければならない課題を自分に課していたいのです。

また、弟たちもよい職業をもてるように助けてあげたいと思っています。そして私の人生における最大の強みの一つは母であることは忘れてはいけません。母は私に、たくさんの強さ、励まし、前に進むために勉強を続ける意欲を与えてくれました。

このような素晴らしい機会を与えてくれた永山子ども基金とパチャママ基金に感謝いたします。

ありがとうございました。

（おわり）

名前：Julio Abel Daza Monteiro
地域：イカ　　年齢：30歳

　みなさん、こんにちは。私の名前はアベル・ダサ・モンテイロです。ロレト州イキトス市の出身です。現在私はイカに住んでいますが、リマ市で勉強しています。ペルー自治大学でシステム工学を専攻して8期目になります。

　私の家族は、父、母、２人の妹と弟１人、姪１人です。私たちは団結した家族で、時には他の人と同じように問題を抱えることもありますが、逆境に負けずに前に進む方法を知っています。

　COVID-19のパンデミックにより、私たち家族の経済状況や雇用状況にも影響が出ています。現在、働いているのは母と私の２人だけです。経済的に困難な状況ではありますが、家族の基本的な生活費をまかなうことができます。

　そのため、この奨学金は私にとって無条件の支援であり、勉強を続けるモチベーションになります。通常の授業に参加するため必要な授業料、その他にも課外授業などの自己負担金があるので、奨学金には助けられています。

　もしこの奨学金がなかったら、私は永久に学業を続けることができず、ずっと先延ばしにしていたかもしれません。さらに、パンデミックの中で、大学での勉強を続けるための資金を得ることは、さらに困難だったでしょう。そのため、永山子ども基金とパチャママ基金から奨学金の支援をいただいたことに、とても感謝しています。

次ページへつづく▶▶

▶▶前ページのつづき

私自身が向き合わねばならない課題はたくさんありますが、その中でも雇用状況は失業やCOVID-19への恐れがあります。

一方、オンライン授業は教育のオンライン化としてポジティブな変化であるけれど、さらなる開発と改良が必要です。その中でも、学生の活動や試験を行うために、電波のいいインターネットを利用しなければなりません。

これらのハードルをクリアするために、私はグラフィックデザイナーやウェブ開発者として自分が提供できるサービスをもっと宣伝し、オンライン化することにしました。これにより、私の学業と家族のために必要な費用をまかなうことができます。よりよい電波を得るために共有のインターネットサービスを契約したので、オンライン授業を受講する上で複雑な問題はありません。

だからこそ、日本からの奨学金を受けられる機会を与えてくださったことに感謝したいのです。日々積み重ねる実績は、私を信頼してくれたみなさんのためにあります。私はあなた方の支援がいい方向に導いてくれると信じ、最大限に活用したいと思います。

最後に、学業を終えた後は、大学で学んだことを活かしたスキルを身につけるために、仕事をしたり、専門的実習やボランティア活動をしたりする予定です。

将来的には、現在の問題、特に子どもや青少年に関わる問題を解決するためのプログラムやシステムを開発する、技術ソリューションを提供する自分のビジネスを持ちたいと考えています。つまり、子どもたちのためになるということです。子どもたちは、よりよい社会を実現するための鍵なのですから。学位、修士、博士課程で勉強を続け、専門性を高めていきたいと思っています。

（おわり）